

〔研究ノート〕

稲富流鉄砲伝書の金銀泥下絵

当館の所蔵品のひとつに、「稲富流鉄砲伝書」があります。

戦国時代、鉄砲の威力が知れわたると、砲術と鉄砲生産に大きな関心が向けられるようになりました。その技術指導にあたったのが砲術師で、鉄砲の構造や火薬の製法、そして射撃法などを体系づけ、いくつかの流派が形成されました。稲富流はそうした砲術師の一派で、稲富伊賀守祐直（号は一夢斎、1552～1611）を初代とします（1）。一夢は、大坂の陣をまえに、鉄砲鍛冶を指揮して大量の鉄砲を作りととのえ、徳川家康や秀忠の信頼を勝ち得ました。その後、稲富流は砲術の代表的な流派となりました（2）。

砲術師は砲術を伝授した相手に、いわば卒業証書のような形で、鉄砲伝書を書写して授けていました。その奥書には砲術師の名前と、伝書を受けける相手の名前、そして授与した時期が記録されていますので、伝書のおよその制作時期や受容の場を知ることができます（3）。

こうした鉄砲伝書は数多くあり、華麗な金銀泥下絵をいれた料紙を使用する豪華な特注本もいくつか知られていますが、その白眉が当館の「稲富流鉄砲伝書」です。一夢

の孫弟子にあたる砲術師が、越前の松平忠直に授けたもので、慶長17年（1612）9月の奥付があります。

その金銀泥下絵については、2000年に当館で開催した「稲富流鉄砲伝書の世界」展と、当時当館に在籍し、その展覧会を担当した澤田和人氏による「館蔵品紹介『稲富流鉄砲伝書』について」（『美のたより』130号 2000年）で紹介されました。澤田氏が整理しているように、当館の「稲富流鉄砲伝書」は、三種類の伝書をひとまとめにしたものです。それらを仮にA、B、Cと分けると、Aは松平忠直に伝授された慶長17年奥書の折本19帖で、使われている紙に、金銀泥の下絵が施された華麗なものです。Bは、Aとはほぼ同じサイズで、おそらくAと同時期に作られたと思われる、未完成の1帖。そしてCは、松平忠直直筆の小さなサイズの折本で、元和4年（1618）の奥書がある1帖です。

みごたえがあるのは、Aの金銀泥下絵です。宮島新一氏は「同時代の障壁画にもこれだけ躍動感に満ちたものはない」と評されましたが、まったく同感です（4）。伝書は長い間しま込まれていたらしく、金も銀も、作られた当初の輝きを保っているこ

とも驚かされます。

ところが、その後、研究者の熱い視線を集めたのはCでした。Cに用いられている、金箔に菊花流水紋を空刷りした見返しの紙が、岩佐又兵衛（1578～1650）や、その周辺で作られた絵巻の見返しと同じものとみられ、そこから又兵衛風絵巻の制作年代や制作の場を推測する有力な手がかりが得られるからです。

それに対して、Aの金銀泥下絵については、その量が多いこともあって、全容の調査と公開は遅れていました。そこで、この下絵について、すこずつ、調べ始めています。

現時点で気づいたことを列挙しますと、下絵は、一紙（縦25cm×横96～105cm）ごとに完結する絵が多く、16世紀の連歌懷紙の下絵とは比較にならないほど、多彩な主題と図様をみることができます。全部で80紙ほど使われていますので、下絵もそれに近い数がそろいます。一図一図、完成度が高く、意匠を凝らした源氏絵、狩野永徳や山楽の金屏風を彷彿とさせる巨木図、そして詩情ゆたかな浜松図や網干図などがあり、みていて飽きません。

なかには、春の柳を描く柳橋柴船図【図1】と夏の柳を描く柳橋水車図【図2】のように、二つ並べれば一雙屏風の縮図のようにみえる下絵もあります。こうして、春と夏の柳橋図があるのだから、このほかに、葉をはらはらと落とす秋の柳橋図や、雪をかぶった冬の柳橋図もあったのではないかなど、つい想像したくなります。

そのような想像に駆られるのは、以前からよく知られている屏風に、雪をかぶった柳と橋を組み合わせた、寒々しい冬の「柳橋図屏風」【図3】があるからです。ながいあいだ、室町時代後期の作ではないかといわれてきたのですが、直線的で細い幹をもつ柳、画面を斜めにくぐる橋などは伝書のものに似ているように思えます。あるいは桃山期の作品かもしれません。

どうやら、この「稲富流鉄砲伝書」は、近世初期の装飾的で華麗な絵画の記憶、いわゆる桃山百双のイメージを今に伝える秘伝書でもあるようです。 （泉 万里）

※図3は、大阪市立美術館編刊『中世屏風絵』1979年より複写しました。

- （1）宇田川武久「鉄砲の伝播と遍歴の砲術師」『鉄砲伝来の日本史 火縄銃からライフル銃まで』吉川弘文館 2007年。同『江戸の砲術』東洋書林 2000年。
- （2）国立歴史民俗博物館編刊『歴史のなかの鉄砲伝来 種子島から戊辰戦争まで』2006年。
- （3）澤田和人「美術史からみた砲術書」前掲注（2）『歴史のなかの鉄砲伝来』52頁。
- （4）宮島新一編『日本の美術』430 唐紙と金銀泥下絵 至文堂 2002年 69頁。

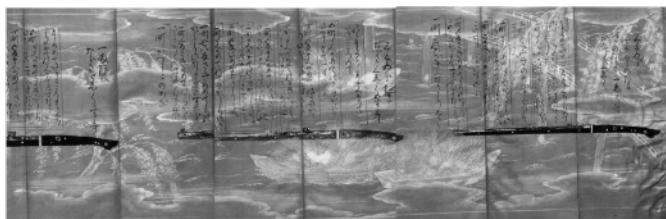


図1 柳橋柴船図（春）

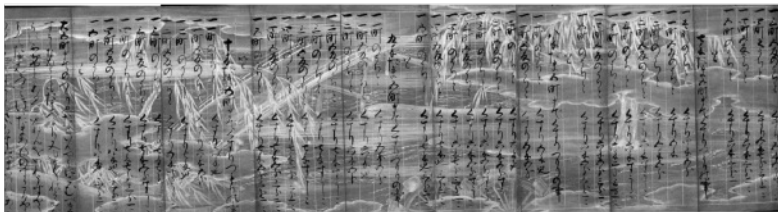


図2 柳橋水車図（夏）



図3 柳橋図屏風（個人蔵）